

# 在宅医療の未来を築く お人好したちの挑戦



赤羽 重樹先生  
(横浜市神奈川区)

50歳になってすぐのこと、自転車で乗って患者へ向かう途中、右手の一部が突然動かなくなった。原因は、学生時代の野球中の事故にさかのぼる。1塁へと走りしたら内野手と衝突し、首の骨がずれてしまっ

と、この30年間、常にしびれを感じていたとはいえず、どこか信じられない出来事。周りからは明るく大らかな性格にみられるが、芯は計画的で、几帳面な性格である。先々を考えると恐怖でいっぱいになった。

## 躍動 ~この人~ 会員紹介のコーナー



### 患者に入って知る 医療が最優先ではない事実

いまは思いっきり、外来診療・訪問診療に打ち込む。加えて、超高齢化に向けた啓蒙活動にも着手。「冒ろ

《プロフィール》 埼玉県出身。1986年、埼玉医科大学卒業。福島や鹿児島、神奈川での病院勤務などを経て、2007年「西神奈川ヘルスケアクリニック」を開業。「在宅医ネットよこはま」東部ブロック代表世話人。

には、頸椎4つに人工骨を埋め込む大手術が必要だった。受ける決断はしたものの、仕事を休むことはせず、手術前夜まで訪問診療を続けた。よく驚かれるが、「患者さんと接している方が自

う造設」といった患者家族に向けたテーマに限らず、将来を支える中学・高校生に向けて在宅医療について考える場の提供や発信を行うなど、活動の幅を広げている。また、新たに薬を出

ただ、開業医となり在宅医療にも本腰を入れて知ったことは、「医療が必ずしも最優先事項にはならない」という事実。病院であれば



「在宅医ネットよこはま」のメンバーたち。一番左が赤羽先生

そうした中、支えとなつていのが「在宅医ネットよこはま」の存在。日常の悩みや不便さに対する改善策をとことん考え抜く医療者のネットワークである。ここに集うドクターと言えば、ノーと言えないお人好しばかり。だけど、手間取る事例も多く経験してきたからこそ、あらゆる場面で応用が利く、頼りにできる仲間たちだ。

あと10年足らずで75歳以上人口は500万人以上増える。在宅医療の現場は一層厳しくなるだろう。だが、「彼らと一緒に道を開ける気がする」  
先生の挑戦は続く。(木)